

短歌表現（X） —コミュニケーション技術における学習効果の検討—

土 永 典 明

Tanka Practice（X）: Composing poems of daily life and nursing care

Noriaki Tsuchinaga

はじめに

短歌の歴史は古い。「万葉集」という日本最古の和歌集が、成立したときにはすでに存在していたと考えられる。万葉集は全二十巻からなっており、四千五百首以上の歌が収められている。万葉集などが著された時代において、短歌（和歌）は文字に書いて見せるものではなく、声に出して詠み、詠うことで相手に伝えていた。万葉集に続いて古今和歌集、新古今和歌集などが続く。その中で、短歌は貴族の嗜みとして詠まれるようになっていった。中世に入り貴族から武士の時代になると、短歌は歴史の表舞台から遠ざかる。更に室町時代になると連歌や俳句が庶民の間に流行したことで、短歌は更に影を薄めた。短歌の歴史としては、江戸中期に滑稽を主にした狂歌が流行した事は見逃せない。そして明治に入ると、天皇・皇族の御歌や歌会を取り扱う御歌所が宮内省に設けられた。その後正岡子規らによる和歌革新運動を経て、現代の短歌へつながっていったといわれる。

「良い短歌」を作る以前に、人は、普段から自分の気持ちを言葉に変えるという姿勢が大切である。特に大人になるほど、自分の考えていることや気持ちを言葉で伝える機会は増してくる。短歌は、言葉を使って自分を表現するための一つの方法なのである。自分の外側は写真で写すことができるが、内面まではできない。心の内を表現する一つの手段が短歌と言うことになる。短歌には深い味がある。その人の折に触れての感情表現でありつつ、その人の生き方の象徴になっている。

I 短歌の作り方

まず、テーマを決める。そのテーマについて、詠み手自身がどのような感想をもったか、一文で書き留める。その一文を題材に、五・七・五・七・七の土台にしていく。短歌では、31文字という不自由さをもうけ、文章としての自然さよりもリズムやテンポを優先する。詠み手独自の新しい表現を生み、そこに詩歌性というか文学的な何かが生まれてくる。次に詠み手である作者はどの単語と互換しようかと悩むし、それに合わせて漢字、ひらがな、カタカナのうちどれを使おうかと、31文字の制限のなかで考えていく。よくある情景を書きとめただけでは、まだ短歌にはならない。短歌では、その情景に作者の

発見を加えることでおもしろさが生まれる。さらに、三十一音という短い音数の中できり返しや反対の意味のことはを用いることでその歌には、リズム感や変化が生まれて歌になる。

短歌をつくるとき、詠み手は、「情景」と「発見」、あるいは「発見」を含んだ「情景」を考えるようにする。書き出した言葉の中で「楽しい」とか「虚しい」とか、自分が思ったことの中になる言葉は横に置いておく。そして残りの言葉で歌を組み立てるようにする。歌は、ふと心に浮かんだ感情や、強い印象を受けたできごとを「つぶやく」場合もあれば、「誰かに思いを伝える」場合もある。誰にでも分かる状況が展開され描写されていくことも多い。その状況の描写にこそ、上の句や時として下の句の大半が費やされ、最後のほうに、動作の結などの落ちがあることにより、その歌には、作者の思いが滲んでくる。したがって、テーマは起、状況説明は承、締めは転か結という要素になる。落ちには対象を描写するだけの落ちもあれば、メッセージ性のある一般的な動作による落ちもある。また、擬人法などによる仮託的な落ちや、時としてストレートな形容詞等の用言による作者自身の真情の吐露の落ちなども様々なものがある。短歌を詠むときには気兼ねなくそれらの落ちを字数内に収めていく。短歌では、体言止めの技法を使用すれば、テーマが後となる場合もある。短歌で体言止めを活用することは、そこに切れが出て、テーマを強調する効果がある。短歌は、日常のささいな出来事を詠んだ歌も数多くある。日々の暮らしの中で感じたことを短歌にしてみるのも、楽しいと筆者は考える。

内容によって文語体の方が良い場合と、口語体の方が良い場合がある。しかし、現代短歌は外来語なども多用されるので、口語で詠むのが主流になって来ている。生活の中でも、仕事・学校・家事・育児に焦点を絞って詠むとより自分らしさが出てくる。生活の中でも、ちょっと余裕のある事柄を詠むのもよいかもしれない。気をつけないといけないのは、独りよがりになることである。また、趣味、娯楽には各々の思い入れがあり、その入れ方によっては分かりにくくなる可能性がある。短歌は文献や報告と異なり、自分の感情の高まりを表現するものであって、そのために抒情詩の一つであるといわれている。しかし、それは感情をそのまま表現することではない。例えば、感情的に悲しいというよりも、その感情のもとになったところを描写するほうが、感情がよく伝わる。描写力とは、冷静に感情を押さえて表現することである。しかし、散文と違って、感動そのものが根拠になればならない。

短歌を詠むうえで難しいのは結句である第5句である。短歌を詠むときには、「初句は軽く、結句は重く」と言われる。これは歌の中心になるところは結句に据えるほうが落ち着いた歌になる確立が高いという意味である。どのように結んでもよい。比較的多いのは、助動詞・動詞・形容詞など用言の終止符で終わるものや、名詞・用言の連体形で終わるもの、助詞で終わるものなどがある。詠み手は他人の目からはどう見えるであろうかと思ったうえで表現するならば、真情に深味が出てくるはずである。

Ⅱ 短歌の基本を推敲

推敲とは、自分自身の短歌をよりよくするために語句を入れ替えたりして、自分で考え練ることである。推敲するときのポイントとしては、調べ（リズム）や表記についてなどがあげられる。それと、文法的誤りがないかの確認も必要である。

それ以前の問題として、その歌が自分の表現したいことを適切に表現できているかを客観的に見直すことも大切である。一首の歌を詠んだとき、最初の批評家は自分自身である。また、その歌が表現したいことを誰よりもよく分かっているのも自分自身である。その意味でも、短歌は詠んだままにせず、何度もみつめ直し、まず自分自身で推敲することが必要である。推敲の難しいところは、「やればやるほど必ずよくなる」というものでもないところである。散々迷った挙句、結局最初に詠んだままの歌が一

番よいという結論に達してしまうこともある。それでも推敲に終わりは無いという気持ちで、自分自身の歌を何度もみつめ直してみたいものである。

Ⅲ 短歌でつづる学生の日常生活

1) 介護実習

- 初めてのアセスメントで利用者と深くかかわり距離が縮まる
（講評）実習中に利用者の一人の方をアセスメントした作者。いかに情報収集が必要で、生活歴との関連性が大事であるかを作者は学んだ。
- 朝早く駅に行くたび口ずさむ習ったばかりの数々の歌
（講評）利用者から教わった昭和初期の歌謡曲を覚えたくて、誰もいない駅で電車を待ちながら口ずさんでいた作者であった。
- 手を握り私のことを見てくれるその目と手から優しさわかる
（講評）穏やかで無口な利用者であったが、作者の手を握りいつも微笑んでくれた。そのことが嬉しかった作者であった。
- 何十年仕事と家事をやり遂げた思いでたくさん手の甲のしわ
（講評）仕事と家事を頑張ってやってきた利用者の手を作者は見た。いかにも苦労されてきた手だなと、しわの数の多さでしみじみと感じた。
- 「ありがとう」その一言で一日が幸せになる魔法の言葉
（講評）配膳時や食事介助時などの場面で、利用者からその都度「ありがとう」と言われ、嬉しかった作者であった。
- 「畳み方教えてあげる」と利用者さん流石は主婦だ格が違うな
（講評）実習の折に、洗濯物の畳み方を利用者から教わった作者であった。
- 利用者と話さなくても通じ合う目と目で伝わるコミュニケーション
（講評）利用者との関わりが深くなるほど、非言語的コミュニケーションの精度の高さに気づいた。
- いつかまた笑みが浮かぶと夢に見て今日も今日とて声をかけつつ
（講評）声をかけても無反応だった利用者、いつかまた笑顔が見られるようにと、声をかけ続けた作者であった。
- 実習で愛の告白おじいちゃん白紙の紙に婚姻届け
（講評）実習中に一人の男性利用者から、「結婚してくれ」と白紙の紙を渡された作者。作者はこの利用者の心を傷つけることなく、白紙に自分の名前を書き込んだ。
- 「きよしさんととても素敵」とマダム達テレビの前でミニコンサート
（講評）実習施設のフロアにあるテレビで、女性の利用者数人が氷川きよしのDVDを観て、拍手喝采で熱血応援していた。
- 最終日あいさつ回りで利用者に手を握られて涙浮かべる
（講評）作者は施設実習の最終日に、各居室の利用者に挨拶して回った。その時に自分が担当した利用者が手を握り締めてくれた。
- 「素敵だね」服の刺繍を指さして私も着たいと寂しげに言う
（講評）作者が私服で高齢者施設へボランティアに行った折、利用者が「私もおしゃれがしたい」と寂しげに言った。

○歯ブラシが行方不明で職員がまたかと思い一緒に探す

(講評) 利用者でいつも歯ブラシがなくなったという人がいた。そのたびに職員が利用者と一緒に探していた。

2) 日常生活

○月見草日暮れは白く朝ピンク一日二回服を着替える

(講評) 月見草は夕暮れには色が様変わりする。まるで披露宴のお色直しのようだ。

○月明かりキラキラ光る月見草夜のキャンドル黄に咲く花

(講評) 月見草がキャンドルの黄色の炎のようにキラキラと光っている。おとぎ話の世界のようだ。

○あの頃にあなたと育てた月見草咲いた頃にはあなたはいない

(講評) 二人で月見草の種をまき育てたが、月見草が咲いた頃には離れ離れになっていた。

○初夏の夜月明かり照る草原に凜と佇む君は月見草

(講評) 月の明るい初夏の夜に草原で待ち合わせをしていた親しい人の姿が、見紛うほどに美しかった。

○月見草小さく健気に咲いている夜は凜々しく咲き誇るかな

(講評) 月見草は日中、細々と咲いているが、夜は凜々として咲いている。それが妙にエレガントである。

○夜は白朝がピンクの月見草ほんのり変わる移り気な恋

(講評) 月見草は夜は白で、朝はピンクの色に変わっていく。その様子が移り気な恋を思わせた。

○月見草凜と花咲くその姿月明かり浴びて光り輝く

(講評) 月の光で月見草が存在感を出すように、自分も周りから影響を受けて自分なりに堂々と生きていきたい。その思いを作者は歌った。

○会話中唐突に来る沈黙の間に起こる気まずい時間

(講評) 仲の良いクラスメートと会話をしている中、言葉が続かずに沈黙することがある。気まずくもあるが、変に取り繕うと白々しくなってしまいます。

○母親の「お早う」の声聞こえたら今日も実習元気に出かけ

(講評) 実習中に母親が、朝から笑顔で作者を送り出してくれた。

○祖母作る家庭の料理思い出すサクリホクホクぶりカツ丼

(講評) 離れて暮らしている佐渡の祖母が作る郷土料理を、時折食べたいくなる作者であった。

○時と金どちらの価値が高いのか時より金か金より時か

(講評) 「時は金なり」と言うが、時と金を比べたらどちらに価値があるんだろうかと考える作者であった。

○今日もまた面倒くさいと言いながらご飯を作る母ありがとう

(講評) 毎朝、ぶつぶつと言いながら弁当を作ってくれる母親。内心は感謝しているが、なかなかそれを口に出して言えない。

○啓蟄の虫に驚き感じさせ新生活へ跳ねくる心

(講評) 4月の入学式に出席し、これからの学生生活を楽しみに胸が躍る作者。

○神様の尊き愛を思い出す心豊かなあの学び舎で

(講評) キリスト系の高等学校で学んだ作者。聖書での学びを忘れず生きていく。

ま と め

子ども時代、確かに貧しかったかもしれないが明日が信じられる明るさがあった。昭和の貧乏暮らしには、現代の貧乏とは違う特性があった。貧しいということは普通であった。我が家も同じで母は得意のミシンで和裁の内職をしていた。父母が用事のため外出して家にいない時には、近所の友達の家で遊ぶと夕ご飯まで一緒に食べさせてくれた。テレビは、受像機を持っている家に見にいけばよかった。あした暮らしは裕福ではないかもしれないが、便利だし、持ちつ持たれつの人情があった。低コストの暮らしだったともいえる。その生活で感じたことは、優しさとはテクニックではなく、「体温で感じて」はじめて理解できるということである。自分の人生を知り、他人の悲しみを知ることができたとき、人は心からの優しい言葉がかけられる。できるだけ多くの本を読み、美しいものに触れ、思いやりを持って人に接する。そういうことの積み重ねが、本当に人を美しくする。

筆者は京都で生まれ育ち、四季の変化による様々な景観を味わってきた。数々の寺社が点在する京都の街を歩けば、そこそこで悠久の歴史に触れてこられた。京都の醍醐寺には国宝になっている三宝院や五重の塔がある。観光バスのツアーで来て、あそこだけ見て帰る人が多い。ところが、険しい坂を上っていくと上醍醐がある。南禅寺もそうであるが、毘沙門から山越えの道など、裏にはいろいろな道がある。中学生の頃、筆者はこの醍醐寺（京都市伏見区）の総門から上醍醐をたどって、岩間寺（大津市）までの山道を歩いたことがある。人の心も一緒に、人が自分の心だと思っている部分は、ほんの前庭にすぎないことがある。その奥深くには、自分でも気がつかないさまざまなことがある。

人間、どれほど悲しかろうが辛かろうが、現実はいくら変わっても変わらない。つらい問題がなくなることが解決ではないと筆者は考える。むしろ現実から退くことなく、人は、今、生きている事実立つこと。その苦しい現実から見えてくる世界が必ずあるのである。自然が我々に何かをしてくれるのではなく、むしろ自然から、思い通りには生きられないことを学ぶことと筆者は考える。

そっけない言い方に、温かさを感じる時がある。言葉でいくら取り繕っても、よそよそしさが残ることもある。時間と空間を共有する相手と「私」の間には、意識して発したか否かに関わらず様々なメッセージが行き交っている。人間は言葉だけでコミュニケーションをとるのではない。身体からもメッセージが発せられるのである。

今後も学生とともに、五・七・五・七・七の短歌のリズムを楽しみ、日本語独特のひびきに触れ、豊かに情景や心情を思い浮かべて短歌を詠っていきたい。

参考文献

- 1) 飯塚書店編集部 2007 短歌文法入門（新版）. 飯塚書店.
- 2) 篠原資明 1996 心にひびく短詩の世界. 講談社現代新書.